

自己評価報告書

平成23年4月7日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20500509

研究課題名(和文) 動きの“コツ”の指導基盤としての能動的運動感覚意識の形成に関する例証的研究

研究課題名(英文) Case study on forming the active kinesthetic consciousness about own movement technique as basis for movement instruction

研究代表者

佐藤 徹(SATO, Toru)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80125369

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学

キーワード：運動指導・コツ・キネステーゼ・運動感覚意識

1. 研究計画の概要

学校教育、あるいはスポーツコーチングの場において、指導者が学習者に“動きを教える”(運動指導)活動はもっとも重要な課題であるが、その際、他者に伝えようとする運動を指導者自身がどのような意識で行っているかという「運動感覚意識」は、指導内容および指導方法にきわめて大きな意義を持っている。しかし、人間の動きは脳からの命令に従って発現されるが、その内容がすべて意識されるわけではないことから、意識されている内容だけを指導しても、学習者に不足している運動感覚(キネステーゼ)に適合した運動指導とはならないことが少なくない。無意識的に実行されている動きを支えている受動的キネステーゼの解明が求められることになる。本研究は、現象学的視点からその問題について事例を通して考察するものである。

2. 研究の進捗状況

本研究の課題は、スポーツ指導者に意識されていない受動的キネステーゼを発生論的現象学の方法である「脱構築」によって顕現化し、指導に必要な運動感覚意識を形成する可能性と方法を例証的に探ることにある。つまり、運動実施者に意識されていない匿名的キネステーゼを意識に上らせる“運動感覚意識の覚醒”に関して、その可能性を探求し、最終的には方法論の確立まで目指すものである。

具体的な方法としては、体育授業・スポーツトレーニングで行われるさまざまな運動に関して、その運動を構成している運動感覚(キ

ネステーゼ)の個々の内容を、現象学的「脱構築」の方法で確認し、その例証をもとに運動感覚意識覚醒の理念と方法論を確立する。

これまでの数例のスポーツ運動の実例に関する研究において、現象学的「脱構築」を運動指導の視点から応用した「キネステーゼ解体」の適用を試みた。それによって、自己中心的身体知、いわゆる動きのコツ意識を意図的に取り外してみようという方法でその有効性が実証された。これまでに陸上競技、器械運動、野球、バスケットボール等のいくつかの事例について考察をすすめ、成果を国内外の学会でしたり、論文として投稿、公開した。今後は、さらに多くの運動に関して検証を重ねていくことによって、すべての運動指導の基盤となる共通(一般)理論が構築できると考えられる。

それらの研究成果を土台として、スポーツ運動を指導する立場の者にとって、運動実施の能動的な意識面だけでは、人間の広大な行動地平を十全な形で理解することは到底不可能であり、無意識的な受動的キネステーゼの作用を理解していくことが、人間の運動習得に有用な知見を得るためには不可欠であることを理論的に論述していくことが課題である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

これまで考察した個別研究の成果で、本研究全体の目標の主要部分がほぼ達成されたからである。本研究のねらいは、スポーツにおけるさまざまな運動の実施において、実施者の遂行意識の個別事例を集積し、その共通

特性から一般理論の構築を目指すことにあり、これまでの一連の研究によりその土台が形成されたといえる。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの個別研究の成果から、本質的特性を抽出して一般理論の構築を図る。それによって、個別運動種目、個々の運動の実施感覚の意識の分析作業、は、すべての運動の運動感覚意識の把握にとって不可欠であることが実証されることになる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 富田 統、佐藤 徹、運動指導における動きのコツ意識の把握、北海道教育大学紀要教育科学編、第61巻第1号、pp.329-337、2010、査読なし
- ② 佐藤 徹、運動志向性からみた運動能力評価の問題性、伝承第10号、pp.33-48、2010、査読あり
- ③ 戸倉 広晶、佐藤 徹、運動指導における運動感覚の言語表現と動感共鳴—陸上競技のクラウチングスタートについて—、北海道教育大学紀要教育科学編、第60巻第1号、pp.203-213、2010、査読なし
- ④ 佐藤 徹、運動指導におけるキネステーズ理解の構造 —志向分析能力の形成に関する現象学的考察—、筑波大学大学院人間総合科学研究科学位論文、2010、査読あり

[学会発表] (計2件)

- ① 佐藤 徹 (SATO, Toru)、Lehren vom Gerätturnen aufgrund der ästhetischen Bewegungslehre、Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft、2010年9月27日、ケルン体育大学(ドイツ)
- ② 佐藤 徹 (SATO, Toru)、Eine phänomenologische Betrachtung über die Methodik der Formgenese des Sich-Bewegens -zur Bedeutung der Erweckung des kinasthetischen Bewusstseins des Lehrers-、Jahrestagung der Sektion Sportphilosophie der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft、2008年11月7日、マールブルク(Marburg)大学(ドイツ)